

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 高野 修一 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

1 前 文

今年度は新課程科目の初めての共通テストとして注目されただけでなく、本試験、追・再試験ともに、新課程と旧課程の両方の作問が必要となり、例年に比べ作問担当者の負担は大きかったと思われる。追・再試験については、出題形式は昨年度までの共通テスト日本史を踏まえつつ、新科目である『歴史総合、日本史探究』として、これまでと異なる内容に踏み込んだものとなった。本試験は『歴史総合、世界史探究』に比べ明らかに『歴史総合、日本史探究』の平均点が低かったが、追・再試験ではどうであったか。毎年のお願いとなるが、正確な難易度の検証のためにも、追・再試験の平均点等のデータを公表することを検討していただきたい。

以下、試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

設問数は大問6題、小問33題の構成で、第1問が『地理総合／歴史総合／公共』との共通問題である点、昨年度よりも小問が1題増えた点は本試験と同様であった。かつてのセンター試験のようになりード文はほぼ見られなくなり、初めにどのような学習活動の場面かが簡単に説明された上で、学習活動の過程で作成されたメモや見つけた資料など、様々な情報が提示されて出題される、という形式であった。昨年度までの共通テストでもそのような形式になりつつあったが、学習活動と関連させて出題することが今年度はより徹底されたと感じる。扱われた資料の種類は、現代語訳も含めて史料が多いが、文化財の写真や、グラフ・表なども扱われ、多様であった。

出題範囲は、時代横断の問題も含めれば、原始(古墳)から現代(戦後)までであった。単独の時代の出題で最も古いのは奈良時代であり、時代横断の問題を含めても旧石器～弥生は全く出題されなかった。歴史総合が含まれる分、バランスの良い出題範囲の設定は「日本史B」より難しくなったであろうが、工夫をお願いしたい。

出題形式別では、正誤問題(正文)が7題、正誤の組合せが6題、正文の組合せが6題、正誤問題(誤文)が5題、人物・事項の組合せが5題、年代配列が3題、語句の選択が1題であった。昨年度と同様、文章の正誤を判断する問題が24題と多いことに加え、今年度は組合せでの解答を求める問題が17題もあったのが特徴で、1つの小問で様々な能力が問われ、正解を1つに絞るのに時間がかかることが多かった。

時代別では、単独の時代だけを出题する小問は少なく、時代横断型の出题をする小問が13題と最多であった。各時代単独の出题は、明治・大正・昭和・戦後が各3題、鎌倉・江戸が各2題、奈良・平安・室町・幕末が各1題であった。単独では明治以降の出题が12題と、その多さが目立つが、12題中7題が第1問での出题であり、歴史総合導入による影響が大きい。時代横断型の小問における選択肢を含めれば、江戸の出题が合わせて8題と最多で、旧石器～弥生を除けば全ての時代について何らかの形で扱われている。

分野別では、複数分野にまたがる混合問題を含めて政治分野の出题が15題と最多で、軍事外交13題、社会経済11題、文化8題であった。文化史分野では、文化財の写真を使った小問が印象的であ

ったが、出題数は昨年度と比べ半減した。また、第1問の8題中5題は軍事外交分野単独の出題で、歴史総合という科目の性質上やむを得ない部分はあるが、第1問の中でも多様な分野からの出題をお願いしたい。

次に、各設問の詳細を見ていく。

第1問は『地理総合／歴史総合／公共』の第1問との共通問題で、歴史総合の導入で日常生活における時間概念について資料を収集する場面が題材であった。ところで、第1問は『地理総合／歴史総合／公共』との共通問題である以上、「歴史総合」の試験として作問されたはずであるが、仮に歴史総合を一切学習していなくても、日本史探究の内容が理解できている受験者は、消去法も活用すれば全問正答が可能である。一方で本試験の第1問には、日本史探究の学習では得られないであろう知識が必要となる設問が複数あった。このことが本試験の『歴史総合、日本史探究』と『歴史総合、世界史探究』の平均点の差の一因と考えるが、追・再試験の第1問は、本試験よりも日本史探究選択者にとっては取り組みやすかったであろう。追・再試験の第1問が、本試験との関係において適切な難易度に設定できていたか、平均点等のデータや外部の意見も参考に検証していただきたい。

問1は産業革命による社会の変化や資本家と労働者の関係などの理解を問う内容であった。19世紀のヨーロッパに関するメモなので日本史分野の設問ではないが、日本史探究で学習する近代産業の発展の分野についての理解を応用することも可能であり、逆に歴史総合で理解したことが日本史探究にもつながることを意識できる良問である。

問2は「高度経済成長」や「バブル景気」の時期の知識を基にグラフを読み取る問題であったが、グラフの読解は易しいため、時期の知識があるかが正誤を分ける問題であった。可能であれば、高度経済成長期に(a)と(b)が逆転した社会的背景を考察するような設問が次に続くと、このグラフが設問の題材としてより活きるのではなかろうか。

問3は日本における太陽暦導入に関する設問で、日本史探究を学習している受験者には易しい内容であった。

問4は、年表の「1895年」という情報と、問題文の「帝国主義的な領土の拡大」を関連付けなければ解答不可能で、基本的な知識や時代の理解を組み合わせる能力を問う良問である。

問5は日本史探究ではあまり扱われない歴史用語も問われているが、歴史総合では基本的事項である。また、「ワシントン海軍軍縮（軍備制限）条約の失効」や「スターリンの独裁体制」といった、日本史探究で扱う範囲内の知識を援用すれば消去法で解答可能ではあるが、こうした解答法に依存させないような選択肢の作成をお願いしたい。

問6は正答の①を正文と判断するには「イギリス連邦」の知識が必要であり、日本史探究の知識だけでは対応は難しいように見える。しかし、②と④は日本史探究の知識で誤りと判断でき、③はパネルの文章を読めば誤りと判断できる。歴史総合の学習が不十分でも消去法で解答可能であると考えられるので、こうした解答法に依存しないような肢文の工夫をお願いしたい。

問7は、冷戦と朝鮮半島情勢についての知識を問う設問であるが、「冷戦」「西側（東側）」などの用語を設問中で一切使用していないため、その出題意図を読み取れるかどうかとも問う、工夫された出題となっている。この設問も問1と同様、日本史探究の学習内容が歴史総合に応用できることを示す問題と言える。

問8は戦後の沖縄に関する設問で、ノートの読み取りと知識の活用の両方が求められている。

第2問は博物館を見学する学習活動から作問された。昨年度まで「日本史B」の第1問に配置されていた、全時代を扱う大問であった。

問1は解説文の内容と知識を基に絵画史料を読解する設問で、図2の右の少年の袖は色の都合で

やや見づらいが、図1で解説文の内容が補足されているため親切な出題である。

問2は室町時代の貿易と鉄砲の伝来に関する基本的な知識を問う設問である。ただ、どちらも基本的な内容で設問全体の難易度が低いため、空欄イは銃の国産化に関する内容（例えば生産地など）を問う形でも良かった。

問3は江戸の農業や学問、幕末の貿易などに関する内容が総合的に問われているが、正解の③の文章は、ある意味当然な内容であり、メモの内容も知識も関係なく正文と判断しやすい。メモの中にある『綿圖要務』が河内の百姓に購入されたことをより直接的に活かした選択肢にするなどの工夫があると良かった。

問4は明治政府の農業政策の知識を問う基本的な設問であるが、③のようにやや不自然な書き方と考えられる肢文もある。歴史的事実から極端にかけはなれた状況設定にならないような工夫をお願いしたい。

問5は時代の転換と衣服の変化に関する文章の正誤を判断する設問であるが、受験者にどのような学習を求めることを目指した設問か、意図がわからなかった。①は形象埴輪についての基本的な知識があれば推測可能で、②や③は教科書の記述に近い文章である。④は教科書等に直接的な記述はないため、①～③が正しいから消去法で④を誤りと判断することを求めているとしたら、適切な出題とは言えない。さらに、「1940年代後半の日本がアメリカ文化の影響を受けた」ということは多くの教科書に記述があり、占領期に若者たちの間にアメリカ風のファッションが流行したと説明する教材もあるため、こうした記述に向き合ってきた受験者は④を正しいと判断してもおかしくない。歴史総合や日本史探究の一部の教科書では、ベトナム反戦運動の影響を受け、ジーンズが対抗文化の象徴として流行したことに触れられているため、④は「1940年代後半」の部分が誤りである、と判断することを求める意図であったのかも知れないが、「1960～70年代頃に流行した」ことは、「1940年代後半に流行しなかった」と判断する根拠としては不十分である。「ジーンズ」という単語が、特定の時代に限って用いられる歴史用語として定着しているとも思えない。元々一部の職業の人々の間で作業着などとして使われていたジーンズが、「流行」と言えるほど人々に普及するのが、アメリカでさえ1950～60年代頃からである、という知識があれば「1940年代後半の日本でジーンズの流行は考えにくい」と推測できるが、このような知識を求めたり、あるいは不十分な根拠で推測を求めたり、消去法で解答することを求めるような設問は、受験者に誤った学習を促すメッセージになりかねない。もし消去法を活用する設問のままにするとしても、「適当でないもの」ではなく「適当なもの」を選ぶ設問として、誤文をあと2つ作った方が作問も解答も容易である。あるいは、「1940年代後半」を「1940年代前半」とするか、「アメリカ文化」を「ベトナム反戦運動」とするなど、誤りがより明確な文章にするべきであった。

第3問は古代日本の特徴についての複数の仮説を検証する探究活動が題材である。

問1は古代の地方官について幅広い時代にまたがった理解を問う設問。

問2も仏教について古代から中世にかけての幅広い時代の理解が問われた。問1・2は扱う内容が「地方官」「仏教」と異なっているが、基本的な用語の知識で正答できる点や、時代とともに変化したことを問う点では共通した出題であるので、どちらかは史料と関連付けるなど、異なる思考が求められる出題であるとよかった。

問3も表を使っているとは言え、出羽国の設置時期や、平安京に遷都した天皇の政策など、基本的な知識を問う設問であり、表の形式をとって出題する意味があるか疑問がもたれる。

問4は現代語訳された史料の読解と知識の両方が求められるが、「駅家」などの語句の暗記にとどまらず、律令制下の情報伝達に関する理解を問う良問であった。

問5も「大極殿」が何であるかの理解を求めており、具体的な場面についての記述と習得した知

識とを併せて活用し、判断させるような学習指導が求められている。

第4問は「中世における仏教と国家・社会との関係」という主題が設定され、その探究活動の過程から出題された。

問1は歴史用語の使用を避けた記述から時期を判断させるという、これまでの共通テストでもよく見られた形式である。歴史用語の理解度を測るのに適した出題形式であり、今後も継続していただきたい。

問2は文化財の写真の知識を求める設問で、いずれも教科書に写真が掲載されている有名な文化財であるが、文化財の写真を見て覚えるだけの学習にならないよう、例えば各文化財の特徴（他の時代のものと区別できるような、見るべきポイントなど）に言及するような資料やメモなどを併用した作問もあり得よう。

問3はどちらの文章も知識だけでは判断できないが、会話文の下線がない部分の発言を読めば判断しやすくなるよう工夫されて作問された良問である。

問4は何の知識の活用が求められているのかに気付くのがやや難しく、この時代の仏教の特徴についての十分な理解も求められた。

問5は日本史探究で求められる、時代を通観した学習活動が出題された。何ができるようになることが受験者に求められるのかを示された設問は、授業改善にも有用であり、こうした設問は歓迎したい。

第5問は江戸時代の大名と藩についての発表準備から出題された。

問1は中世の守護や戦国大名と近世の大名について、広い時代にまたがる知識が求められている。単独で出題されていない戦国・織豊期を問う工夫が見られるが、それぞれの選択肢の間には関係性が認められないので、メモ1に「どのような点が異なっていたのだろうか？」とあるように、これらの存在を比較するような選択肢があると良かった。

問2は第4問の問1のように歴史用語を使わない記述から時期を判断させる問題であるが、判断が容易な基本的事項のみを扱っている。

問3は現代語訳されていない史料の読解に加えて江戸時代の学問についての知識の活用も求められている。文化史分野の学習で用語を暗記するだけでない学習を求める姿勢はここ数年続いており、歓迎すべきことであるが、限られた授業時間の中で学者の思想内容を理解し、応用できるようになるまでの授業をどのように作っていくべきか、教育現場にも工夫が求められている。

問4は三つの文章の正誤を全て正確に判断しなければならず、受験者にとっては解答に自信を持ちにくい形式であったが、誤文は誤りの部分が比較的に見つけやすいよう工夫されている。基本的内容を問う設問では、この形式を今後も活用していただき、消去法などに頼るのではなく、基本事項を正確に理解する学習を受験者に促してもらいたい。

問5は表が「人口」という数字に基づき作成されている一方、選択肢は「都市の数」という異なる数字の情報を読み取ることが求められているため、日本史の学習成果と関係のない部分で誤解してしまう設問であったと思う。選択肢の文章がやや長くなってしまうが、「表の中に現れる都市の数」などのように、「都市の数」とは何か分かりやすくなるよう、表現を工夫した方が良かった。

第6問は20世紀前半を生きた人物の日記に関連した会話文から出題された。

問1は会話文中の生年と当時の年齢の記述から時期を特定する出題で、過去の共通テストでも見られた問い方である。

問2も会話文中の年齢の記述から判断することが求められ、さらに資料の読解も求められている。ただ、「異なる意見」という簡潔な書き方ではなく、どのような異なる意見であったかまで問う内容にして、より深く資料を読ませる問い方でも良かった。

問3は大正～昭和初期の文化に関する基本的な知識が問われた。

問4は「中国残留孤児」がどのような人々であるかと、戦後の日中関係が理解できていれば、資料2の「招待訪日」の時期は資料3、4よりも明らかに後であることが推測できるため、基本的な知識を応用する出題として適切な難易度であった。一方、資料3と4については、「農山漁村経済更生運動」や「満蒙開拓青少年義勇軍」について記述しない教科書も少なくないため、やや難しかった。資料3に「国内外の大不況」とあるため、資料3が昭和恐慌後の時期とわかるが、満蒙開拓団も昭和恐慌を背景に同じ頃に派遣が始まっている。この開拓団と青少年義勇軍を区別できなければ解答できない。資料4と同内容のポスターの写真は資料集などによく掲載されているので、そうした副教材も活用した学習が必要となる。その際に「なぜ青少年が募集されるようになったのか」という疑問を抱きながら学習すると、資料4が3よりも後であることを問う出題意図も納得できよう。

問5は戦後の農業就業者数等の動向についての問いと、それに対する考察を組み合わせる設問で、問いを立てる探究的な学習活動の方法を問う設問であった。WとXはいずれも高度経済成長の単元で学習する内容であり、減反政策開始の時期を正しく理解していなければ判断できず難しい。YとZも時期の違いを判断することが求められているので、WとXは政策の内容など、時期以外の内容を問う形の方が良かった。

3 総評・まとめ

『歴史総合、日本史探究』は、これまでの『日本史B』が標準単位数4単位の科目であったのに対し、2科目計5単位分をほぼ同じ問題数・試験時間で出題しているため、受験者の負担も増加していることを踏まえ、出題範囲・分野や難易度に一層の工夫を期待する。特に今年度は、本試験と追・再試験の第1問（歴史総合）を比較して、日本史選択者にとっての難易度に不均衡が生じていなかったか、検証をお願いする。そのためにも、受験者の平均点等の公表を検討していただきたい。また、第2問の問5のような選択肢は、受験者に誤ったメッセージを発するものであり、改善をお願いする。一方で、知識を活用した思考を求める良問も複数あり、また、歴史総合や日本史探究の学習で得た知識がなくても正解できるような設問や、提示された資料を読む必要のない設問が見られなかった点は評価したい。

新課程科目に基づく初めての共通テストで、受験者も指導者も手探りの状態であったが、それは作問者も同じであろう。そうした中で、昨年度までの出題形式を踏まえつつ、新課程の学習活動を意識した設問も取り入れ、全体として質の高い問題となっている。今後、外部の様々な意見も取り入れながら、教育現場に良い影響を与えられる作問を継続していただきたい。